

## 第16回辰野千壽教育賞 講評

本年度の選考委員会は、優秀賞1編・奨励賞2編を選出しました。いずれも将来の発展・応用がおおいに期待される若手の先生方による実践研究であり、本賞の重要な目的の一つである、研究の「さらなる発展に向け積極的に支援する」に値する、すぐれた取り組みと評価されました。

■優秀賞の高木哲也さんのテーマは、「高校英語授業における言語面の正確性向上を目指した筆記ランゲージングの実践ー日本語を活かして理解を深める新たな英語指導法の浸透を求めてー」というものです。

高木さんは、第二言語習得において、母国語を積極的に使ってしっかり考えさせ言語化させることの効果に着目し、高校生の英作文の推敲過程において、教師から指摘された文法の誤りを生徒自身が詳しく分析し、日本語の文章で記述する、「筆記ランゲージング」という指導法について実践研究を重ねてこられました。

一連の研究において、誤りの原因まで明確に記述できた生徒ほど作文内容の正確性が向上するという、本来の効果が実証されただけでなく、不完全な記述を残した生徒でも文法的改善が認められたケースがあるなど、思考内容を言語化すること自体が深い思考を促している可能性も示唆され、興味深い研究成果が得られています。

高木さんの研究は理解度の高い高校生を主な対象としたものですが、今後、気づきを言語化することが苦手な生徒や、文法的知識の少ない中学生に対して、この筆記ランゲージングという指導法がどのように適用できるか、その際に必要となる配慮や工夫の内容など、研究の発展が期待されます。

以上、これまでの研究の完成度の高さと、今後の発展可能性を高く評価し、優秀賞に相応しいと判断されました。

■奨励賞の有江 聖さんのテーマは、「グローバル・スタディ科におけるICTを活用して主体的に「話す」ことに取り組む児童の育成 ～まるで現地ガイド！？自他と「繋がる」クロマキー合成の可能性～」というものです。

有江さんは、外国語学習において特に苦手意識の強い「話す」活動に焦点を当てています。遠隔交流活動の中で、児童が話すことに主体的にかかわれるための工夫として、有江さんはプレゼンテーションソフトによるスライド提示に加えて、発表者自身をクロマキー合成によってスライド内に映し出して発表する方法を考案し実践しています。その結果、クロマキーを活用した方法では、児童のジェスチャーが有意に増加し、発表者はより臨場感をもって発表し、聞く側も積極的に耳を傾け反応している様子が確認されました。

コミュニケーションにおいて、身ぶりや表情などの非言語的要素が重要な役割を果たしていることは広く知られていますが、こうした非言語要素を積極的に引き出すことによって、話すことへの抵抗感を低減し、発表活動を活性化させたことは興味深い成果と言えるでしょう。さらには、児童の自己表現力や主体性といった、いわゆる非認知能力としての学力形成に寄与する可能性も示唆されています。

有江さんの研究は、授業における ICT 活用研究が、たんに ICT を「使う」段階から「楽しく使う」研究の段階へと進んでいることを実感させるものであり、今後、様々な教科や場面への展開が期待されることから、奨励賞に相応しいと判断されました。

■奨励賞のもうお一方、水流 卓哉さんのテーマは、「AARサイクルの理論を援用した自治的集団の育成」というものです。

水流さんは、教師に依存しがちな児童の現状に問題意識をもち、児童自らが他者とつながり、学級内の問題を解決できる自治的・自発的な学級集団の育成に取り組まれました。そのため、近年 OECD が提唱している「AAR サイクル」を援用し、学級づくりの年間計画の中にこれを取り入れた実践を行っています。

特に注目されるのは、年度当初、児童に「学級づくりのガイドマップ」を配付し、学級づくりという観点での見通しを全員が常に意識しながら、個々の活動を展開していけるよう工夫している点です。その結果、学級集団のまとまりや個々の児童の満足感の向上が確認され、ねらいとした自治的・自発的な学級集団づくりに成功しています。

今回、水流さんが対象としたのは年単位の長期的な AAR サイクルでしたが、AAR サイクルは、個々の活動レベル、週レベル、単元レベルなど、様々な周期での適用が可能です。日常レベルでのサイクルでは、活動の省察によって次の見通しが常に更新され変動するといった、よりダイナミックな変容過程が想定されます。本研究が今後、多様な周期の AAR に拡張され、研究が深められることを期待し、奨励賞に相応しいと判断されました。

■以上、簡単にご紹介いたしました。3つの研究はいずれもユニークな発想と丹念な実証に裏づけられており、今後の発展がおおいに期待されます。この辰野千壽教育賞受賞を機会に、高木さん、有江さん、水流さんが、これまで身に付けてこられた研究力と実践力を発揮され、それぞれの研究にいっそう磨きをかけていただきますとともに、教育現場のリーダーとして、ますますご活躍されることを願っております。

辰野千壽教育賞選考会議議長